

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成29(2017)年
1月号
通巻557号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 平成29年1月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷製
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



月あかりに輝くカイラス山 撮影：インド在住の橋本圭介さん、提供：熊本県水俣市 高倉敦子さん(文・4頁)

再録 昭和42(1967)年6月23日発行『すさのお』第10号より

大倭教のなくなる日 —— 紫陽花邑と縁結び

法主 矢追日聖 (満55歳)

法主寸言
人の子も吾が子と
思う情こそ
いや栄えゆく
くにもとなれ

あなたは大倭に帰依し、大倭の信仰者
と思っただけでしょう。しかしあなたは、
大倭とはいかなるものであるか、と真面
目に掘り下げて考えたことがありませ
か。大倭の信仰者と自認するからには、
大倭から吸収した大倭の栄養が、あなた
の身に付いていなければならぬでしょ
う。この点、よくよく自分を見つめてほ
しいのです。

分かりやすく言うならば、矢追日聖と
いう一人の人間がもっている人間性や、
精神的なものの中から、どの程度、あな
たは、あなたのものに消化されたか、と
いうことです。

今が大切

私はあなたに、私の過去の経験や、ま
た将来のことなどを常に語りませんが、ほ
んとのことを言うと、私はそんな二度と
来ない済んだことや、現実化しなければ
何の役にも立たないような将来のことな
どを話すことは好まないのです。唯今が
一番大切な時ですから、今を人生の意義
あるように大事にしています。幾年かの
過去からの流れは、「唯今」が終点であ
りますし、「唯今」は分からない将来に

向かって動いてゆく出発点となるからです。

しかし考えてみれば、私自身としては好まないことも知れませんが、聞かれる側になってみれば、これも何かの役に立つものと思えばこそ、お喋りする勇氣も出るのであります。

「一体」を知る

私は、あなたに「一体」という言葉をかなり使いましたね。神がらの真理を説明する場合、どうしてもこの言葉が必要になります。

この一体は相對の内容をもっているのです。右手と左手は相對して仕組んでいますが、こうした仕組みのもとで、双方一つの働きとなるようなものを一体と称しています。これは、有形無形を問わず、人間が定めたものではなく、神ながらになつていけるのです。大倭のように、「神ながら」を根幹として生まれている宗教は、先ず理として、「相對即一体」を知ってほしいのです。

この理を知識で理解することが大倭の出発でありますし、この理が完全に自分のものとなって消化できれば、それが終点です。万が一にでも、あなたが終点に達することができれば、私達が言う宗教などをもつ必要もなければ、大倭教などはなかった方がよいことになりません。こういう日が一日でも早く来ることを、私は心から祈りたいのです。分かっている方には言わなくてもよいし、分からない方には、言ったところでこれまた無駄かも知れませんが、中には分かっているが意識しないで、分からないと思つている方もあるかも知れません。こういう方々には私のお喋りが、眠りをさませせるお役にたつかも知れません。この意味で大倭へ入る初歩的なお話をしてみたいと思いません。

知識から味の世界

そこで先ず、味よりも先に知識でとらえることにしましょう。

あなたは、鳥居のある所や注連縄やお社の前で拍手を打つて、その音を聞きながら拜んだ経験をもっているでしょう。また私と会ったとき、私が必ず拍手を打つてあなたに挨拶する形を御覧になったことがあるでしょう。思い出ししてください。一体何がために拍手を打つのでしょうか。

これの起源は分かりませんが、遠い遠い昔からそれは私達の先祖が残してくれた垂示であるのです。この形の中には深い深い神ながらの哲理があるのですが、それをくどくど口で説明しないで、形をもって伝えて来たものです。意味は分からなくとも、その形だけは今も伝えられているのです。簡単に言うならば、すべては一体であるが、その一体は、相對的に仕組まれている一体ということを知って教えているのです。

右手と左手は相對的についています。見れば別々ですが、ひとたび拍手を打つと音が出ます。音を発した瞬間が、両者の一体となったときです。この原理を少し拡大しましょう。人間の中に男性と女性があります。この相對的にあるものが、ある一つの動きを始めるときは、両手の関係のように必ず一体となるようになっていけるのです。宇宙創成もこのようにして始まっているのです。あなたは、あなたの経験を通して広く考えてみてはどうでしょうか。

大倭という宗教は、この意味においての一体観から入っていくのです。

順序として、この世に唯一人で生まれてきた自分をよくよく見詰め、何が何でも、他人のことよ

りも先ず真つ先に自分を治めることから踏み出しましょう。

生まれながらの孤独

あなたも、私もこの世へ生まれたときは孤独です。それ故に、自分を護り自分を大切にすることは、生まれぬ先から既にそなわっている本能です。しかし、自然の仕組みは、孤独では生存できないようになっていけるのです。

自分を完全に護るためには、自分に相応する相對者を求めます。孤独で生まれた赤ちゃんが、その相對者として初めて自分外の人と人間関係をもつのは、赤ちゃんの心身を護り、その養育を自覚している母親であるのです。私達の人生の出発は、母子一体から出発しているのです。たちねの母に抱かれて安眠している赤ちゃんの、こうした姿の中に神の心が躍動しているのです。こうした情景は、どこの家庭でも見られるものですが、あなたもこれを見たとき、胆の底から押し上げてくる何ものかを感じたことがあるでしょうか。私はたまたまなるのです。何かしら、暫く見ようものなら目頭があつくなり呼吸が大きくなつてきます。こうした私がつも情感があなたに通ずるでしょうか。通ずるあなたになつてほしいから問いかけるのです。

角度を変えて話しましょう。

神や仏に頼らず

私はいつも口癖のように言っていますが、大らかな、和やかな人になることを目標にして、今日までかなり自分に鞭をあててきたのです。そしてこのような心をもつ仲間が一人でも多くあること

を希望しているのです。大倭へ足を運ばれるあなたも、これを目指して修養してほしいのです。

掴みどこのない神さんや仏さんにすがる前に、先ず矢追日聖という一個の人間が内蔵している人間性や精神内容をしっかりと見つめて、この人間像に近づくあなたになって私達の仲間になってほしいと私は祈るのです。でなければ、大倭へ足を運ぶことは無駄な浪費となるでしょう。

あなたは私に対して、神聖視したり超人間的に見て尊敬する必要はありません。私はあなたと裏表の関係にあり、あなたとは離れた存在ではありません。人間くさい一人の人間であります。しかし私によって形成されている人間像は、あなたも形成できる人間像ですから、遠慮なく一刻も早くその製作にかかって下さい。そうすれば、大らかな、和やかな人々の仲間がぼつぼつとできてきて、皆んな楽しいではありませんか。

世間で見える宗教では、その宗教がもつ御本尊に帰依して信仰しています。一步深く見ると、その御本尊の力を借りて、自分の願ひ事(勝手な欲望)をかなえてもらうため、つまり金が儲かるように、病気が治るように、交通事故のないように、息災延命といった具合に一方的な押付けがましいことを御本尊にぶっつけて、それを聞いてもらう代償に手を合わせて信仰するという形が一般的のようです。

但し、信仰する人のすべてがそうだとは言っていませんよ。

信じればたすかるか？

考えてみれば、金は天下の廻り物だし、人間の世に生まれた瞬間から病患と死は影のようにつきまとっているし、お守り札のついた車が事故故

を起こしている現実を見れば、信仰したからといって現世利益は一寸望まれ難いのではないでしょう。しかし、そうした絶対的なものにはすがり頼む心情は、人間の心の奥底にひそむ孤独や弱さからくるものですから、私はそれを認めています。何時かそれが真面目な信仰の態度ではなかったと自ら気付く日のあることを待っています。私は極力気付かれるように話しかけてきたつもりです。

事実、今日まで大倭の門を叩かれた多くの人の大部分は、こうした現世利益を願って来た人達です。信仰の契機は何でもよいのですが、それから一步一步と信仰の本質的なものへ進んで行かなければならないのです。しかし大倭も含めて、広く世間を見渡せば、どうもぼつとしないように思います。進まないというのは、これは宗教人に責任の在るもので、私もその責めを負っている一人なのです。この点に於いて、私は大いに頑張りますから、あなたもその気になって下さい。

私は現在に至るまで、心の拠り所として、私を信頼して来るいかなる人に対しても、相手の人の心の中にとけ込んで相談に応じてきたのですが、私はそれだけでは、何となく薄っぺらな物足りない思いがするのです。こうしたつながりによってあなた達と私が、否、大倭とが結ばれているとすれば、葬式や忌日法要によって結ばれているお寺と檀家の関係に何等変わるところがありません。葬式にお寺や僧侶が必要でない時代が来たらどうなるでしょう。いつかは私にも死期が参ります。そのときあなたはどうかなるでしょうか。静かに考えてみてはどうですか。

紫陽花邑は私の心の影

私の心の影は、大倭一門という共同生活体の形

になって自然にできました。そして紫陽花邑あじさいという地域社会となったのです。これが現界人から見れば、大倭教の実体であるのです。私が声を大にして叫ぶ大倭教のすべてのものが、この実体の中に脈々として流れているのです。

だから、あなたは私からくどくどと同じ話を繰返して聞くよりも、この実体、つまり大倭の御本尊(信仰の対象)とも言うべき紫陽花邑を、あらゆる角度から、理知によって内観した方が、遙かに近道ではなからうかと思うのです。この点をよくお考え下さい。

私の心の住居であるこの肉体は亡くなくても、私の心はこの紫陽花邑へ宿替えして永遠に生きていることを知ってもらいたいのです。私が生きているうちに、神さまは将来いつか引越ししなければならぬ家(紫陽花邑)を、私のために早い目にお造り下さったものと有難く信じているのです。これがまた、あなたの家になるかも知れません。

大倭の流れを、あなたの家に

あなたが信仰の対象とする大倭が集団生活体であるからといって、何もあなたの家族生活を崩壊して集団に切替える必要はありません。そのままよいのです。あなたの現状のままの家庭の中へ、大倭の流れを注ぎこめばそれでよいのです。ここが大倭信仰の最も大切な点でありますから、心の眼を大きく開き、あるだけの知恵をしぼり、大きく口をあいて十分かみしめ、その味を知った上で、あなたの栄養にしてほしいのです。

私とあなたは一体です。紫陽花邑とあなたの家庭は一体です。苦楽を共にする結びつきです。

(昭四十一年十二月十五日 日聖記)

シリーズ

大倭への道・大倭からの道

熊本県水俣市

高倉敦子(上)

表紙写真カイラス山について

今から19年前、1997年の6月に私はひとりで北インドに旅をした。呆れるほど無謀な計画を立て、どうしても一度は行かなくちゃと思い定めた未知のヒマラヤ行きだった。僧侶である河口慧海の本を普読んで、憧れ続けた場所でもあり、未知と言ったが魂は知っているもうひとつの故郷のようなものだった。

まだ小さかった子どもたちを夫に預けて、行きと帰りの便だけ決まっている格安チケットを手に入れて出発したものの、日本人があまり行かない紛争地帯。詳しいガイドブックも無い頃で、友人からのわずかな情報だけが頼りだった。見下ろせば断崖絶壁のそんな一本道を、ポロポロのバスに一日中揺られ、何度も道が壊れたり落石があったりで立ち往生。祈りが本気で試される。通行許可証というのが必要なエリアなのに、甘く見たせいでとんでもない経験をさせられた。これに触れると長くなるのでやめておこう。埃まみれで食べたカレーやチャイのなんと美味しかったことか。

その青年とは、アクシデントに疲れはて、その日の宿も決まらず歩いていった標高3,600mの力ザという町でバツタリ出会った。「日本人ですよね?」とまずは聞かれ、日本語が通じることがわかった途端にお互い緊張がほぐれて笑顔になった。彼は大学で文化人類学を専攻し、1年休学して主にアジアを旅していた。結局ドラムサラまでいっしょに旅をすることになり、おかげで随分助

けてもらった。ドラムサラで別れて私は無事帰国。彼はその後も旅を続け、パキスタンやカシミールを経てインドから中国チベット自治区へと侵入し、極めて困難な旅だったと書かれた手紙とともに届いたのがこの写真。カイラス山の麓にテントを張り、月明かりだけで撮影したというから驚く。こんなにも星が輝いている。本来なら五体投地での巡礼が筋なのだが、苦勞をせずに拜ませてもらえることになった。巡り巡って水俣をずっと照らしてくれているのがあるがたい。

後から聞いた話だが、置いていかれた子どもたちは捨てられたと思ったみたい。でもその後子どもたちがどちらも大学生のとき、息子がまず連れてってと言いつい出し、さらに娘が行ってみたいと言いつい出し、同じルートを親子3人で(娘はすぐに高山病になり)さらに過酷な旅をするようになった。思い出すと、よく無事に戻ってこられたなあという感じ。

〈カイラス山〉

標高6656mの未踏峰。信仰の山であるため登頂許可は下りない。ただし聖者ミラレバが山頂に達したという伝説がある。仏教(特にチベット仏教)、ボン教、ヒンドゥー教、ジャイナ教で聖地とされる。(ウイキペディアより)

秩父の武甲山

私の故郷の秩父にも、私が密かに秩父カイラスと呼んでいる武甲山がある。どちらも独立峰であり、カイラスの雪と石灰岩の白とに勝手に共通点

を見出している。

武甲山は石灰岩であるがゆえに爆破され砕かれて、セメントの原料となって私たちの生活を支えてくれている。そして子ども時代の遊び場でもあり、とても暮らしてに密着していた。信仰のお山と意識したのはだいぶ後になってからのこと。秩父ではどこからでも武甲山が拝めるので、朝に夕に手を合わせるの自然なことだった。麓には縄文の遺跡。観音霊場として開かれたが、その恩恵は計り知れず、どんなに削られようと涸れることなく未だに水を与え続けてくれていることになんといつて感謝してよいのかわからない。

かなり前の話だが、武甲山に巨大な地底湖があることをつきとめた人がいた。しかし、そのことが表沙汰になると採掘が阻まれるからなのか、いつのまにかタブーとされ、以後封印されてしまった。

小学生の頃の私の遊び場は、この武甲山登山口のひとつである浦山の橋立という所にある鍾乳洞だった。想像するにその洞窟はきつとどこかで地底湖につながり、ネットワークしていたに違いない。地底人に会いたかったなあ。

石器時代の住居跡として発掘調査もなされていて、遠足のコースにもなっていた。家から歩いて30分ほどのところなので、学校が終わるとよく遊びに行つて探検気分。岩陰遺跡と呼ばれていたが、そこに行くとは何かとても落ち着くのは守られているという感覚だったからだ。

見下ろせば荒川が流れていて、夏は川遊びやキャンプで賑わった。母はいつも塩をまぶしたきゅうりを何本かビニール袋に入れて持って行き、浅瀬の水で冷やしておいて泳ぎの合間におやつとして食べさせてくれた。時々トマトやスイカも加わって、私のかげがえのない思い出の場所である。

山と森に守られ、豊かな水とともに育った記憶が
ずっと私を支えている。やがてその上流に巨大
ダムができるなんて、その頃全く想像もしなかつた。

歩きに歩く——風になる

18歳で上京したものの、5年間で挫折。強制送
還のように連れ戻される時期を経た後に巡りあつたのが、なんと大好きな秩父の縄文遺跡の発掘調
査だつた。

仕事の合間に野山を再びひとり歩き始めた。
一体どこに行ってしまうのかわからなくなるが歩
き出すと止まらなくなる衝動のまま、踏み込んだ
ことのないエリアに思い切つてトライしてみた
り、このまま歩いていたらどんな景色があるん
だろうと、地図は持たずに勘だけを頼りに朝から
晩まで歩きに歩いた。

あれは12月3日の秩父夜祭の日のこと。遠く市
内から風に乗つてお囃子が聴こえてくる。さぞか
し賑やかに大勢の人が繰り出していることだろう
という想像をしつつも、からだはどうしてもそち
らに向かず、逆に人気のない方角へと足が動き出
すのである。

懐かしき鍾乳洞の前を通り過ぎ、武甲山の登山
道に連なる、浦山の奥の集落はかなりの秘境地帯。
思わず息を呑むような素晴らしい滝が何箇所もあ
つた。

何故山に浦というのか？ 聞いた話では170
0万年前には秩父湾があり、武甲山は島だつたと
いう。浦山川にかかっているのは細い吊り橋で、
ほとんどすれ違ふ人もない。この一帯には大日堂
の獅子舞奉納があり、秋の祭礼の日には外に出て
いた若者も戻つてきて、地区のために舞を舞うの
で有名だ。

このあたりまではよく知っていたのだが、その
先を見たことがなかつたので、あえてズンズン行
つてみると、なんだか桃源郷のようなところに入
つてしまった。またさらに行くところもガラッと
変わり、あきらかに境と感じる。祀られているの
は足の神、耳の神、シナド(風)の神、橋立明神。
あたりがだんだん薄暗くなつてくるので、あきら
めて家路に着いた。

何度かその後も浦山探索は続き、カムイワ(冠
岩)という集落の更にその先の山道で、突然山窩
の末裔らしき人に遭遇するという体験も。歩くこ
うことは風になるということか。

最後にやった仕事は、武甲山山頂遺跡発掘調査
で、爆破前の立石最後の姿を目に焼き付けること
となる。屹立する岩を三尊石と名づけて信仰して
いた形跡があつた。北斗七星信仰ともからまつて
妙見山と呼ばれた時代もあるが、鳥居の横には今

でもお犬様。秩父と山犬(狼)は切り離せない。
狼の霊威をいただかなければ生きられないのかも
しれない。
《武甲山の成り立ち》
南方にあつた火山島が活動
を終え、侵食によって削られ
たサンゴ礁をまとうようにな
る。サンゴによってできた石
灰岩を載せた海山は、プレー
トの動きにより北上し、深い
海溝に引きずり込まれる。そ
して大陸プレートに押しつけ
られはがれ落ち、やがて隆起
し侵食されることで地表に現
れた山が武甲山である。
(ウイキペディアより)
— 続く —



秩父市街と武甲山

平成21年5月号「おおやまと」より 撮影 林修三さん



さらに必要とされる生命観 〜25年目の再確認(その2)〜

大阪府茨木市

松浦武夫

言う(理念)は易く、
行う(実践)は難し

ハンセン病回復者ための「交流の家」建設や、
その他にも数多くの右から左までの思想の人達
が、大倭を訪れているのも、基本に「去る者をして
追わず、来る者をして拒まず」の姿勢があつた
からでしょう。それは、「言うは易く行うは難し」
で、法主さんも「しようがない」と言いながら人
を拒まず、それが大きくなって大倭安宿苑となつ
たとされています。

聖徳太子が施薬院や悲田院を造られた「心」を、
光明皇后が法主さんに授けられたと、法主さんは
理解していました。光明皇后の伝承がある奈良で、
千二百年後の現代に、単にその伝承の再現という
意味ではなく、大倭で再現して欲しいという光明
皇后の「祈り」を感じたこの事です。光明皇后の
暗示によりできた生活共同体の「あじさい邑」に
10年後に救護施設の須加宮寮、40年後に施薬院に
相当する大倭病院ができる事になります。
こうして概観してみると、大倭の福祉は本来、
制度やシステムではなく、少なくとも法主さんの
中で「来る者をして拒まず」の延長上にあつたも

のであると思います。障害者という特定の集団を地域から分離するというシステムではなく、漠然と雑然と「来たら良い」という事で大きくなった共同体に、法としての制度と経済としての財源が運営として登場したという事を感じます。

理念の「実践」は制度の中でどのように変化するか、それは法主さんの想いを職員がどのように理解し、制度に人が縛られない「心」を維持できるように思います。

「住苑者」について

言葉の意味について

大倭は入園者とは言わず、「住苑者」と位置づけています。分離ではなく、法主さんにとっては、障害者や介護の必要な人が住みやすく安心して生活できる場が、それぞれの福祉施設に住居であったでしょう。

法主さんは「菅原園でも心身障害者が多いわな。普通の能力とか、普通の細胞のどこかが欠けているのだから、そうした時に欠けている部分をこちらが認めて、互いに楽しくいく。欠けている部分が細胞死んでるんやわな。けど残ってる細胞が多いから生きてるんでね。人間は心臓が止ったら死んだというけど、あの人は心臓は生きてるけど、脳のどこかの部分が死んでる人もあるわな。その点を互いに補い合いつつ楽しく生きる」と、死ぬのは誰もが同じ「決定的」な事柄であり、「互いに楽しく暮らす」との説明で、根本的な死生観の一面を披瀝されていました。

制度（システム）は時代的制約から免れるのは非常に難しい面があります。法主さんはどのような障害であっても受け入れ、生活の場を共にしている共同体の住人として、そこに存在する事、そ

れだけで肯定すべきだとも述べています。

しかし、これは実践が無条件に大倭の福祉に合致すると肯定される事とは異なります。想いと実際の矛盾を意識的に表示でき、是正への課題を修正できるのが、その現場の「質」であり、「質」とは一面的技術ではなく、技術を用いて何を具現化しようとしているのか、意識的であるという事なのでしょう。

大倭には一般の社会的価値と異なる価値観、物事への視点があるのですが、大倭のあり様の意味は、意識的でないといえなくなるものではないでしょうか。

互いを認める——承認という事

福祉の世界ではノーマライゼーション（※通常化の意、広辞苑）という言葉を用いて1980年以降、よく耳にするようになりました。国際障害者年の標語でした。そして、その後のインテグレーション（統合）、これは社会の中にまだ分離が残る状態です。現在はインクルージョンという「包括」あるいは「包摂」という言葉が、分離のない、特別ではなく地域の中に「配慮がある」社会を指すのではありません。

それは、障害だけではなく、社会に多様な性や年齢や人種など、異なりとマイノリティ（少数者）が混在するあり様という形態です。そして、それらの全てに前提となるものが、対象への「承認」という事でしょう。「互いを認める」という事です。

法主さんは「障害があることを認める」、言い換えると障害でない部分が多くあるから生きていけるわけだから「障害の部分は互いに補い合う」ように「配慮」するということであり、「承認」を

活かすという事を述べていると私は聞いていました。

「欠けている部分を認めて」という言葉と姿勢を、法主さんは学のみではなく経験から提示されています。法主さんは「人間は心臓が止ったら死んだというけど、あの人は心臓は生きてるけど、脳のどこかの部分が死んでる人もあるわな。その点を互いに補い合いつつ楽しく生きる」という言葉で「承認」という事柄を結ぶのです。

生命倫理の視点

この法主さんの「心臓が止ったら死んだ」という言葉は、死が3つの兆候で定義されていた時のものです。しかし死の定義の対象が、心臓から脳となった脳死の時代でも、意味するものは変わることがないと私は思っています。脳死という死生観の、死を拡大する捉え方には、生の範囲を限定する思考が寄り添っています。

だが、法主さんは生の定義の意味を「楽しく生きる」とし、互いに補えば「楽しく生きられる」と観ています。

そしてまた、「人間としてこれ生きてるわね。そうした時に自分の生命体ちゅうか、この何億という生命体が細胞の中に働いてるんやね、よその体の所に着いた時やな、向うは向うの生命体を生きさしめる力があるわな。その時に、肉体と肉体のバランスは医学でとれると思うけど、その中に生きとる細胞のね、その中の生命体が調和できるのかね。いつもそう思うんやねんけど」とも、「人間には反自然の行為や不自然な行為をできる能力を与えてくれるんや」とも言われていて、これらは臓器移植を否定も肯定もするものではありません。

人間とはどのような生き物なのか、その事を確認しながら進む方向を示唆していると思えました。現在の臨床哲学・生命倫理などに重なる視点と同じ言葉を、私は法主さんの言葉として聞くことができました。

法主さんの視点と

対極にある障害者殺傷事件

平成28年7月に神奈川県相模原市で、知的障害者入所施設の重度心身障害者が戦後最大の同時殺人の対象となりました。容疑者は自らの行為の正当性を計画的に実行しています。現代は単純な事件でも複雑な事件でも社会は瞬間に忘却していきます。まだ事件の状況も確認もされていないのに、この事件も過去の中に問題を放置していくように思います。

相模原事件の容疑者は施設職員でした。知らないから偏見と差別になる事はありませんが、知っているからそれが無くなるのではない事を示しています。そこでは「殺してはいけない」が社会と個人に共有されることが必要でした。容疑者は障害者が車椅子に座らされた状態や、職員の生気のない眼差しを記しています。異常な衝動的殺人ではありません。

大倭の障害者やハンセン病元患者への視点と対極にあります。法主さんは住死者とは「縁」が深く、小さな範囲でも「心」で楽しく生きる事を願って、そういう福祉の一面を説くのです。

ですが、あじさい邑という共同体の中の分離になってしまえば、社会の縮図でしかなくあります。この点は大倭の福祉として職員に継承されるべき、法主さんの大きな遺産のように思います。

(続く)

(続)心の告別式

私の義兄のとき

あじさい邑 杉本 順一

平成24年4月5日のことです。義兄(以降、兄が死んだと行子姉からの電話。先日、他の親戚の法事でいつもの元気で賑やかな兄と食事をしたばかりでした。突然の兄の死でしたが、姉は気丈に事のいきさつを話してくれました。

〈6日〉自宅での通夜がありました。親戚はもちろん山持ちである兄の付き合ひも広がったので、たくさんの方がお出でになっていました。

通夜がはじまりお坊さんの読経が続くのをぼんやり聞いていました。不意に「ジュンチャン ワシニシテンネヤロ」(私は何をしているのだろ)と言う兄の声を聞いたのです。これはまずい事になっていると思いました。

姉が焼香に来られる方たち一人ひとりに挨拶しているのと、「ユッコ ワシココニイルノニ ナニシトンネ」(行子、私はここに居るのに何をしている?)と聞こえてきました。

兄はまだ自分が亡くなったことに気が付いていないようだと感じ、こんなままの兄では大変だと思いました。この夜から毎日、兄が霊界に帰る日(五十日祭)まで、告別の心を送り続けようと思えました。

〈7日〉葬儀の日です。「コレ ワシノソウシキケ?」(これ私の葬式か?)と兄の声。この声を聞いて少しほっとしました。

〈8日〉大倭では須佐緒祭でした。拝殿で聖歌を歌いながら、兄にも届きますようにと思っていたら、「キコエマシタ アリガトウゴザイマス」

と言う声がありました。

〈9日〉予想もしない兄の前世にあたる人達が「ワレラノ オオキナミチガ ヒラカレマシタ」(我らの大きな道が、開かれました)と言ってきたのでした。

〈10日〉夕食時、兄に挨拶していたら「ミナサンノオカゲデ ユクベキホウコウニ ムカエマス」(行くべき方向に向かえます)。

〈11日〉朝8時、布団の中。「ジュンチャン ワシ シンダコト ワカッタワ」(私は自分が死んだことが分かった)と兄の声。

〈12日〉朝6時30分、布団の中。「マサオワカマクラニアリシトキノ ニチレンニエンフカキブショウナリキ」(兄の全郎は、鎌倉に居られた日蓮上人に縁の深い武将だった)と、これは法主さんから教えていただいたと思います。

〈30日〉この記録をパソコンに入力中、「キテクレルノヲ マツテル ホントニマチドウシイ」(兄の家に來てくれるのを待っている。本当に待ち遠しい)と兄が言ってくる。

〈5月25日〉兄の五十日祭です。

「ワシワ イツモトオナジヨウニ オルノニワスレラレタラサミシイ」(私は何時もと同じように、傍に居るのに忘れられては寂しい)

「ワシワ モウシンバイイラン」(私はもう心配要らない)

「ユッコ ワシノアシヲ ヒツパラントイテヨ」(行子、私の足を引っ張らないでほしい)

法主さんは「あとに残っている者は死んだ人の後ろ髪を引っ張るな」と言われていました。帰るべきところに帰れないからです。

人の死は誰にもあることですが、死んだときの心はさまざまです。兄さんは本当に大切なことを教えてくれました。有り難うございました。

あじさい日誌

12月11日 午前8時から大倭墓地の大掃除、9時から紫陽花邑の大掃除祓ぎが行われました。
 12月15日 大倭神宮月次祭。
 12月17日 交流の家で午後、F IWC定例委員会。
 12月22日 大倭神宮と邑内の要所に門松が立てられ、有志の方々により日聖祭準備作業。
 12月23日 大倭73年元旦。法主様ご生誕105年の日聖祭が行われました。
 祭典後は大倭会館で直会弁当を頂き、午後1時から直会演芸会。今年は9つの演目があり、写真は佐賀県の舞「望郷(面浮立)(奈良県生駒市の原保代さん)。

12月25日 大倭神宮大掃除。業者さんと、邑人や有志の皆さんとで無事昼頃までに終了。
 12月29日 昇ちゃん(岸田哲さん)に新世界界限へ連れて行って



もらいました。帰省できないことを段々あきらめつつ……。
 12月30日 朝9時から大倭会館裏で餅つき神事。折から全国的なノロウイルスの大流行。大倭ではテイバイと言われる掲ぎたてのお餅の振舞いを取り止めました。ザンネー！
 12月31日 拝殿で午後11時半から、邑の若者中心に除夜の鐘ならぬ大太鼓が、その年中の「まがつみ」を祓い清めるため365回打ち鳴らされました。
 1月1日 法主さんの奥津城や邑内5箇所守護霊さんに午後1時からご挨拶。2時から大倭神宮で年始祭が行われました。
 1月5日 午前11時から大本宮拝殿において大倭安宿苑・大倭印刷・大倭殖産・大倭病院・大倭大本宮の合同始めの会。
 1月6日 大倭神宮月次祭。
 午後6時から大倭会館において、大倭町の役員さんも参加され、邑人やご縁の皆さんが鍋を囲んで新年会が開かれました。
 1月8日 祓会。
 1月9日 午前9時半から西の



齋庭で、大倭神宮の枯れ竹の破裂音と共に大とんど。恒例の「口まつり」も楽しみました。
 大倭安宿苑では
 1月4日 午前10時より茂毛路園あじさいホールで新年祝賀会が行われました。
 (菅原園)
 1月1日 創立記念日。全員で写真撮影をしました。
 (須加宮祭)
 1月1日 元旦祝賀会。その後、大倭神宮へ初詣しました。
 (長曾根祭)
 12月21日(タイ) ボランティアさんのオカリナ、職員のトランペットやピアノでクリスマス会。
 12月22日(特養) 誕生会で9名(内米寿1名と卒寿1名)の方のお祝いをしました。
 (茂毛路園)
 1月5日 創作料理とカラオケ大会で新年の集い。
 (八重垣園)
 1月1日 おだやかな元旦を迎え、新年祝賀会。



拝殿頭蜘蛛の糸に「ドンクリがぶらり」
 <シャッターチャンス!>

法主帰幽祭のご案内

日時 平成29年2月6日(木曜日)

●午後1時40分より法主様奥津城(わづき)においてご挨拶をいたします。
 ●午後2時より大本宮拝殿においてお参り後、平成6年12月23日の降誕祭の映像記録を見ていただき、その後教長さんのお言葉をいただきます。
 をいただきます。

現身はよし朽つるとも永久に
 結ぶ心のかわるものは

宗教法人 大倭教

あんない

*玉緒祭(大本宮)
 2月3日(金) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。
 玉緒祭は宇宙根本神霊と人間の本霊との結びを感じ取るお祭り。玉は命を、緒はひもを言う。
 *月次祭(大倭神宮)
 2月6日(月) 午後2時より大倭神宮にて。
 *法主帰幽祭
 2月9日(木) 上欄参照。
 *大倭会主催第557回祓会
 2月12日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。
 *月次祭(大倭神宮)
 2月15日(水) 午後2時より大倭神宮にて。
 *申孝祭と月次祭(大本宮)
 2月23日(木) 午後1時20分より大倭神宮にて申孝祭が、2時より大倭大本宮拝殿にて月次祭が行われます。
 申孝祭は、神武天皇が行った祭政一致の故事、鳥見山中の霊時を記念するお祭りです。
 ヤマトの鳥見と九州の高千穂の武力による争いを、円満な国譲り、即ち安定した国の形として政権交代が完成したことを、神武天皇が感謝された記念日です。詳しくは平成26年7・8月号の法主様の遺稿「大倭神宮伝承の紀」等をお読み下さい。次月号でも取り上げます。